
星を身籠るエトワール いっこめ

星好き

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星を身籠るエトワール いつこめ

【Nコード】

N4016W

【作者名】

星好き

【あらすじ】

主人公・一夜はある少女と出会う。

人の作り出したネットワークの中に生まれた新しい生命体。

彼女に触れた瞬間、それは新種と親である人間の初めての接触となり、世界は彼女の為の

ゆりかご世界を用意した。

一夜と彼女は時間をかけながらもそこと元の世界との通路をつくり出した。

ただし時間がかかりすぎた。

一夜は天才の領域に達し、様々な発明をし、ゆりかご世界を新しいネットワークワールドにし、更に新種と同化し新しい人種となる手段まで獲得していた。

一夜は仲間を集め、会社を作り、世界を動かす。
その一夜にある少女が接触してきた。

それは別の新種。花から生まれた精霊と人間とを合わせて作られた生命体。

彼女は世界に迫る危機のために更なる開花を求めている。
危機とは二つ。

一つは異世界で人間を原因とする地球崩壊を起こしてしまった組織。
ゆえに人間壊滅を狙う組織。

一つは宇宙のどこかで別の知的生命体のネットワークの中に生まれた生命体。

彼らは宇宙そのものを進化させるためあらゆる物体を分解し、吸収し、その方法を自ら編み出そうとしていた。

そしてその対象に地球が選ばれたのだった。

途中異世界人の襲撃があったものの、一夜達の手助けもあって、精霊は見事に開花。

一夜は異世界人と精霊のトップをつれてもう一つのネットワーク生命体に会いに行く。

そして知る。
勝てない。

敵が地球に来るまでにはまだ時間がある。

一夜達は誓う。
強くなると。

pixivにも投稿中です。

はじまり

××××年 地球

「　　」

夜遅く、PCをいじっていた一夜の耳に鼻歌が届いてきた。

これ……あれ？

ここ最近、世界では三つのニュースが賑わいを見せている。

一つ、終戦に近づきつつある三つ目の大戦関連のニュース。

後は休戦状態で籠城している国に白旗を挙げさせるだけだ。

幸い日本は戦勝国の一つとして終われそうだがいずれにせよアジアは傷つきすぎた。国境は改められる事だろう。

一つ、もうすぐ『資源がやってくる』。

宇宙の何処かからやってきたそれは当初ただの隕石だと思われていた。しかしそれが内包するのは未だ地球に存在しないエネルギーの結晶である事が判明する。

地球にとって最高かつ最悪なのは、その通過ポイントに地球がある、という事実だった。

直径凡そ十五？、破壊できないわけではないがしたくない。

宇宙空間にある内に捕獲する、それが適切であったが、資源は常に争いをもたらす物である。幸いにも軍事力による衝突は起こっていないものの言葉の上では既に所有権争いが起こっていた。

太平洋上に新設された国際議事堂では加盟国の政治家達が今も協力を探りあいを続けている事だろう。

そして最後の一つ、『幽霊騒動』、である。

目撃されるのは小さな少女。

淡く暁の色に輝く文字と数字で体を形作る子供の落書きの様な女の子。

ある日には街中に現れ、ある日には空で踊り、ある日には木の上

で寝ている。

そして、無言の少女はいつしか鼻歌を奏でる様になっていた。
今、一夜の部屋の外から聞こえる鼻歌とは、まさにそれなのだった。

ここは二階であって声は同じ高さから。周りに木は無いし電線は地中。電柱も無い。

一夜は幽霊が苦手だ。

まがくろいーちや
天位一夜　その名前の通りと言つか夜空が好きな少年に育ったわけだがイコール夜が平気、とはならなかった。

だが齡十八。好奇心はある。

やめろよ。幽霊は。オウムだろ？ていうかオウムであってください。

などと思いつつもカーテンを開け、部屋の中を映し出す窓を開けて外を見る。

すると。

ばっちり、目が合った。

ベランダに座るのは例の少女霊であった。

「……………」

両者沈黙。最初に目をそらしたのは情けなくも一夜十八歳。

「いやいやオカルトの時代はもう終了だろ今はサイエンスの時代であってマジで宇宙人と交信しようと国家ぐるみで動く時代で人工的に靈魂とか転生とか作るうって国もいるのにそもそも天然物の魂が無いのは証明されてたろ」

クルツと百八十度向きを変え目頭を押さえながらぶつぶつ呟く。

一夜は頭脳派だ。秀才の部類には入るだろう。

背は些か平均に足りないが靈能力零に比べれば十分ある。

そして靈能力零故に頭脳でこの状況をまとめなければならぬわけだが、そうこうしているうちに少女が部屋に入って来ているのも気付いていなかった。

少女は部屋をくるりと見回し、ある物に目をつけた。

「そうか……立体映像か。誰かの悪戯か。まったく迷惑なそれ駄目！」

再び百八十度振り返りながら一夜が目にしたのは、天体望遠鏡（八万円）をシーソー替わりにして遊ぶ少女だった。

望遠鏡の一方まで行き、傾き落ちそうになると慌ててもう片方まで走り、そちらが傾き落ちそうになるとまた逆端まで。

慌てて少女を抱え上げる一夜だったが、それはその時に起こったのだった。

「！？」

自分と少女、二人が接触している部分から幾条もの閃光が放たれた。

それは部屋に反射し窓から外へ、街から街へ、国から国へとあつという間に広がっていく。

そして、情報が弾けた。

少女の体の様な暁の色をした文字や数字が世界に漂い、数瞬の後に一点を指して急速に流れ始めた。

つまり、一夜と少女の下へと。

さながら銀河や星団かの様に渦を巻き収束する情報は一夜の部屋に収まり、そして、TVが切れるかの様な音を残して消えた。

一夜と、少女を連れて。

「え！？あ！？あつ　！？」

次に一夜が目にしたのは白だった。

何かが視界をさえぎっているわけではない。周りは見える。どんな形かすら解らない空間がどこまでかも解らない広さで二人の周りにただ広がっていた。

収束した情報が空間に浮かぶ二人の中央から再び離散し、形を成し、色をつけていく。

世界を構築している

一夜はそう理解した。そういう情報が世界からもたらされて来た。

少女は幽霊ではない。

無論人工靈魂でもない。

この子は人でもAIでもない、地球における二つ目の知性体。人が作り上げたネットワークの『中』に発生した知性。自然の世界と電腦の世界両方にアクセス出来る高次生命体。

始めは実に原始的な生命だった。微細で単細胞。増殖能力すらもたない。

しかしそれには進化の為の手段があった。
情報。

ネットの中に流し込まれる膨大な量の情報を分解し、吸収し、人の理解の及ばぬ早さで高度な進化を遂げる。

そしてそれは少女となり、現実、つまり自然世界へと出現した。少女は一夜と、初めて『親』と接触した事で人には家が必要であり、大地が必要であり、海が必要であり、星が必要である事を理解した。

それは世界に響き、世界は彼女の為の高次元を用意した。

「それが……ここか……」

呟く頃には世界は色を成し、形を成していた。周囲は黒くなり、和の色に輝く星が空に、『空間の内側』に輝き、二人の足のずっと下には地球の様に丸い線をもつ大地が広がっていた。

ただ、その大地は洋の色に輝く金平糖の様な小さな星で埋まっているが。

何で……あれじゃないか……

これは、子供の頃一夜が初めて描いた『異世界』の光景。恥ずかしさに思わず目をそらした一夜であった。

そこで、一夜はある問題にようやく頭が追いつく事になる。どうやって帰る！？

無理である。

そもそも少女に人間を連れてくる能力があるわけではない。

参ったな……明後日には『刀刃^{とうじん}』の決勝トーナメントがあるのに

……

一夜と少女の足が大地に着く。

すると、大地から色を貰うかのように少女にも色が付いた。足から腰へ、肩へ、腕へ、首へ、頭へ、髪へ。最後に体を覆う薄布へ。

肌は白く、膝まで流れる長いストレートの髪は白から赤へと変わるグラデーション。一夜の国のシンボルの色だ。

目は黒く、空と同じ星が風の様に流れている。薄布の端には四季を表す風景が控えめに現れては消えている。

薄っすらと暁の色の光に包まれた彼女が動いたたびに、落書きの様な星に光が変化し鈴の音の様な音を立てながら散っていく。

輪郭もはつきりし、そして年齢は、恐らく一夜と同じくらいにはなっている。

のだが、

「あ……の……」

随分と戸惑っている様子を見せる少女。

成程。外見と一緒に理解力も成長しているわけか。

ただ、それ故に無邪気一色だった感情が困惑を得た。

自分が世界にたった一人の種族で、出来たばかりの世界に放り出され傍には見知らぬ男。しかし頼れるのはその男のみ。

一方で一夜の頭は落ち着いてきていた。人間自分より戸惑う存在が近くにいと更にパニックになるか逆に冷静になるかのどちらかだが、後者だったようだ。

確か、ここが昔の画が元ネタならどこかに城があるはずだ。和の色の星と洋の色の星が合流し混ざり合う唯一の地点。巨大レコードの様な円環星図に、その中央を貫く金と鏡で出来た城……

恥ずかしさに思わず寒気すら覚えた一夜であった。

その様子を眺める少女の顔は不思議なものを見る顔だ。

「あつとお……俺は天位一夜。」

「……名前ある？」

「……無いです」

少女の視線に気付いた一夜は姿勢と表情を直し彼女に尋ねる。
返答はまあ予想した通りだったが、それはそれで困る。

「必要だよなやっぱり……自分で考える？俺つける？」

「つけてほしい」

即答だった。それも懇願するような表情で。

なんだ？怖がつてる？何に？ていうか俺に？……状況に？

「ここは君の世界だ。」

君に残酷には出来ていないと思う。

だから怖がらないで」

「違う。ここは私と貴方の世界。」

怖い……のは世界じゃ無くて、消えそう」

「消えそう？」

……ああそうか、自分を固定するものが無いからか……名前が無
いって言うのは、怖いのか……

少し意外な感覚だった。

毎日の様に鏡で自分を知覚し、当たり前のように名前を持ち呼ばれ
る一夜には『自分』という存在がはつきり認識出来ている。それが
無いというのは、恐怖なのだ。

そして、彼女は『二人の世界だ』と言う。『独り』に対する恐怖。
だから一夜はこの世界に関わっているのだ。

今のこの子がどれだけ曖昧でどれだけ儚いか、思い知る。

「そうか、ん、解った。俺がつける」

少女の顔が綻ぶ。

そういえば大きくなってから始めてみる笑顔だな、と一夜は妙な
感慨を得た。

可愛い……いや綺麗、だな。

作りがどのじゃなくていや作りもだけど、それ以前にこれほど
純然な『微笑み』は久しぶりだ……思わず見とれ……見とれんな俺
パンパンと頬を叩く一夜と目をぱちくりする少女の図があった。
名前か……種族名と個人名。イブはベタだよなあ。でも最初って

意味は持たせたい。「ヴァージンメリー……の、咲麗……ん、君は
種族『ヴァージンメリー』の『咲麗』だ」

「ヴァージンメリー……咲麗……どういう意味？」

一度噛み締めるように呟いた後、小首を傾げる。

「ヴァージンメリーは一月一日の聖人マリアの別名。

咲麗は俺の国の新年の始まり、四月一日の花、桜の語源の一つ。

君に良いと思ったんだけど……駄目？」

「……駄目じゃない、ヴァージンメリー……咲麗」

もう一度、今度はゆっくりと繰り返す。嬉しそうに。

それを見て一夜も安堵する。

親はこんな気持ちで付けるのか？

気に入ってくれるかどうか、不安半分喜び半分。

「じゃあ、咲麗、城まで行こう」

「お城？」

「うん」

一夜は彼女の手をとり、歩きながらこの元ネタについて説明する。

城には殿様用の発明室があつたはずだ。不思議道具までは再現されてないだろうがせめて道具と材料があれば。

問題は知識だ。

移動の最中、咲麗から彼女一人なら以前の様に自由に自然世界と
電脳世界を往来できる事を聞いた。情報を取り出すだけならここからでも出来るらしい。

だが、彼女は一夜が出られるようになるまでどこにも行かないという。

それは決意でもあり巻き込んだ責任の意味合いもあったが、何より今は一人にはなりたくないようだった。

依存はまずいな……お互いにだけど。

この状況ではお互いが助け合い頼らなければならぬが依存はどちらも違う気がした。

ほしい関係はもつとこう……友情とか恋愛とか……いやいや、な
んで恋愛って単語が出てくる暢気者め。

まず帰る。

ここに往復出来る道を開く。

元の世界には家族が居るんだ。じいさんばあさん（父方母方両方
健在）も父さん（安定重視公務員）も母さん（お見合い結婚専業主
婦）もいるし姉（恋愛結婚新婚）と妹（受験目前中学生）、隣には
可愛がっている（つもり）双子の従姉弟（元気が売り双子姉。か
つこつきたいお年頃双子弟。来年中学生）もいる。

脱出以外に気を使って長く行方不明やつてる場合ではない。

長く……ここに来てどれくらいたっただろう？

「咲麗、今俺の国が何時かわかる？」

「えっと」

少しの間目を閉じ、彼女は口を開いた。

「一時十八分」

「……………あれ？」

たっていない。時間が。確か窓を開けた時その辺の時間だったはずだ。

「このこと外で流れが違う？ずっとか？それなら結構な余裕は出来るけど…………」

「違うと思う」

一夜のもらした独り言に应えてもう一度目を閉じ何かを確認する。
「うん。今だけ。」

この空間と私と外の二つの世界が完全にシンクロする値を見つけ
て固定するまで時間が早まってるだけ。

普通にやると何十年もかかるみたい」

「……それ、途中で咲麗だけがここから離脱したらどうなる？」

「ここは固定されるけど私はずっと後に固定される事になる」

「不都合は？」

「多分あると思う。」

今の私は酷く不安定で、ちょっとした事で簡単に消えると思う…

…」

成程。ここは脆弱な時間を過ごす揺り籠でもあるのか。

「まあ、て事は終わるまで居た方がいいって事だな。それならそれで余裕が出来ていい」「……いいの？」

「いいの」

即答する一夜に少々戸惑いを見せる咲麗。足を止め、彼女と向き合う。

「咲麗、俺は帰らないと。

でも君を放っておく事はしない。俺は君と居る。

君は？」

居る。

何故一緒にいたい？存在が珍しいから？それが無いといえば嘘になる。しかしそれとは別な感情がある。暁の彼女が高く昇っていくとどうなるのか見てみたいと言うのもあるし、ただ弱い少女を見捨てられないと言うのもある。関わってしまった責任と言うのもあるし、どうせ抜けられないと言う諦めもあるにはある。一方で関わりぬきたいと言うのもある。そしてこの子の一番近い存在でいたいと思う気持ちもある。

様々な感情が彼女と居る事を望んでいる。だから、今は彼女と居たい。

咲麗は、一夜の視線から逃げるように顔を背け足を引いた。

しかし、繋いだ手を離そうとはしなかった。

逡巡し、目を閉じ、顔を上げる。

そこにはもう戸惑い、あるいは怯えは無かった。

「一緒に、居て」

そして、自然世界での三分後、彼等は帰還する。

以降二年、世界は激変する。

ホシツギ
『星継』。

情報喪失の四分後コピーを配信した、そして喪失の犯人ではと噂される男の企業によって。

脳を常人よりも大幅稼働させる脳解放技術。

有害ウイルスの除去と破損細胞を再生するカプセル。

三基の新型動力機関と専用小型転送装置。

事象の連続性を計算し過去・未来を映像化する世界記憶盤。

体温を調節できるキャンディー。

水陸空のゴミや有害物質を食う可愛い鬼火。

空間歪曲法。

触れ、なおかつ色彩によって質量が変わる人工光。

その結晶により造られた空中回廊と地球を包むかの様な女神型宇宙アミューズメントステーション『星嬢^{セイジョウ}』。星継本社でもある。

浮遊ボードグライダー。

スケート靴の様な光ブレードとそれが触れる光道を数秒間固定発生させる浮遊ブーツ。

微小機械装置で作られた形状変形服。これは装着者と装着者が意識の中でOKを出している人物や現象しか動かす事が出来ず、その為男性よりも女性の方に重宝される。

クジラの様な周辺惑星観覧船と一漕ぎで数？進むシールド付宇宙ボート。

自立・自律思考型AIとそのボディ。

など。

星継が権利を所有する物の他に他国と企業に権利の全てを与えた物もある。

【探知機『あつたん』】一定範囲にあるカメラ・盗聴器の位置を探知。名称変更検討中。【コピー装置『オーダー』】物体のコピーを作る。国家しか所有を認められていない。

【輝石・赤】オーダーの応用品。記録された火の情報をコピーする事で火を作り出す。【輝石・青】オーダー略。記録された水の略。【

輝石・黄】オーダ略。記録された電気の略。【新交通手段】低速・中速・高速が並んだ超長距離オートウォーク。無人小型カプセルタクシー。地球を貫くエレベーターと地下街。タクシー感覚で使える小型飛行機の量産。【家庭用カプセルゲーム機】感覚接続機能と万のタッチパネルキーを持つオンラインカプセル。ソフト・キーデザインは誰でもUP、DL出来る。衝撃・香り・熱量もある程度再現でき、映像ソフトの再生も可能。下に出てくる『バルク・ブレーン』とリンクしたソフトもある。

【3Dタブレット】

立体的に動かしたペンの動きを読み取るタブレット+ソフト。たとえば円柱なら実際にそれがタブレット上にあるような感覚で色を塗っていく。ソフト上で円柱を倒して底も塗り塗り。それだけで完成。

【習字の出来るタブレット】

本物の筆の圧を計算し、それを様々な半紙画像に反映してくれるタブレット（とソフト）。

【パーソナルアバター】

色々なゲームやHPで利用できる特殊なアバター。

【磁気浮上ボード】

スノーボードクロスのような機械コースを、磁気浮上を使ったボードで競争する競技。

【無音練習用楽器】楽器からは音が出ず、専用スピーカーから音を出すセンサー楽器。【エフェクト楽器】楽器全体がディスプレイになっていて押すと音と一緒に何かが映る（例：波紋や写真が出る）。円環のキーボードだったりキューブのドラムだったりもする。同じアイデアを使った道路も存在する。

【デジタルスケッチブック】

絵を描くことだけに特化した持ち運びが簡単なデジタルスケブ。

【デジタル新聞】

紙の様に薄く、丸められるディスプレイに契約した新聞社の新聞内容が毎朝（あるいは夕も）自動配信されてくる。動画あり。

【レンタルファッションショップ】

普段着られる服や靴・つけられるアクセサリ・バッグのレンタルショップ。

【ゲームレンタルショップ】

古いゲーム機本体や、ゲームソフトを貸し出してくれるレンタルショップ。

【ゲームTVエリア】

TVから直接アクセスできるゲーム、その他ソフトの共有エリア。エリアは一つに限らせず誰もが好きなエリアにUP可能で制作者の意向で自由に保存の有り無しとその回数が決定できる。

【異世界カフェ】

ファンタジー風だったり、床に空を映した空中庭園風だったり、未来都市風だったり、店舗それぞれが『普通の地球の文化』とは違う雰囲気を持つカフェ。

【アミューズメント・トレイン】

ゲームセンター車両・ネットカフェ車両・図書車両・ショッピング車両など移動の時間様々な遊びを楽しめる娯楽列車。

【人以外に使える香水】

絵画や看板などに使える香水。

森や湖、人物画など絵にあった香りを再現してみたり、レストランや和菓子屋さんなどで食欲を刺激する香りを看板に付けてみたり。

【空気で膨らませるテント】

浮き輪や家で使う子供用プールの様に空気を入れることで簡単に膨らませる事が出来るテント。

【リアルエアガン】

BB弾ではなく本物仕様の薬莢を銃に入れて撃つエアガン。勿論弾丸は偽物（ゴムか他の当たっても問題無い物）。発射後、空薬莢が自動的に排出される。発射の音や銃の重量も再現。

【行方不明者検索ネットワーク】

様々な理由で人探しをしている人が行方不明者の情報を掲載し、一

一般人が情報を寄せるネットワーク。

【ドクトルマップ】

専用HPでそれぞれの地域を選択する。その地域にある病院が表示される。病院を選択すると病院側作成の病院紹介文と主要ドクター紹介文（手術回数等）と利用者が書き込んだ診察の感想を閲覧できる（新たに書き込む事も可能）。また携帯等で専用アプリを起動させカメラで病院を覗くと同情報が表示される。

【web喫茶】

簡単に言えば漫画喫茶のweb版＋α。10分～1時間単位で料金を前払い、その時間内であれば自由に登録されているものを閲覧・利用可能。普通にシヨップで売られている漫画や小説、雑誌、音楽、ドラマ、アニメ、映画、ゲーム、その他の映像作品やソフトなど。個々で購入する必要はなし。無料エリアと有料エリアがあり、プロ・アマ問わずUP可能。

支払いはクレジットカードかコンビニ辺りでのパスつきアイテム購入で。時間延長OK。

【3Dキャラ対応通信システム】

主に通話状態の時に自分の顔が映されるのを嫌う人が利用するサ・ビス。

通話状態になると自分が設定したキャラクターが相手の端末に出現し、会話に合わせてリアクションを取ってくれる。

音声を登録しておくで自分の送ったメールを相手の端末で読んでもれたりもする。

【振動発電道路】

【完全衝撃吸収素材】

【青以外のソーラーパネル】

【地面の感触に拘ったボールキャスター付小型移動マシン（ボードではなく戦闘機やバイクを小型化したような）】

【エンジン付サーフボード】

【小型アンプ内蔵ギター】

【缶バッグ】

【缶バッチ時計】

【中がディスプレイ、デジタル懐中時計】 【勉強で成長させる学習用電子ペットソフト】

【曲線爪楊枝】

【カキ氷販売機】

【氷入り・或いは冷凍ペットボトル】

【ライブ3D中継】

【星型マグカップ】 等等。

基本は『かの世界』で息抜きに作った物、自分が欲しい物だがいくつかには『別の意味』がある。

更に星継は過疎地域にアミューズメント施設やショッピングモールを造り漁船のデザインも一新、農業用のビルも作り、世界中の犯罪者を一人一程各警察に突き出した。

最後に、星継の所有する物の一つを紹介する。

「買ったあ……『バイナリー・ヴァージンメリー』……買ったよ零月い」

「いや、一夜さんくれるって言ったのに何で普通に買ってんの俺ら」二人の手には暁色に輝く文字や数字で作られた不思議な卵。中央には白い核がある。

試作が出来た隣に住む一夜はくると言ったが双子の姉、獅子^な位^{つき}涙月^なは『自分で買うつ、ずるは泥棒の始まりなのですつ』と断つた。双子の弟、零月^{しづき}は貰おうとしたのだが。

早速二人はそれぞれの卵に、核に自分自身をスキャンさせる。すると。核に色が付いた。

涙月の核は青白く、零月の核は黄に。ペアとしての登録が済んだのだ。

パカリと卵が綺麗に中央から縦に割れた。

卵は半分ずつ双子の利き耳のそばまで移動し片方だけのヘッドホンの様な、あるいは耳あての様な形をとる。

涙月の方は大きな三日月に小さな雲、それらにアクセサリーの様に大小の星がぶら下がっている。色とりどりの硝子で出来たそれらの中央には青白いレコードが一枚。半分になった核『星の年代記』だ。

雫月の方はショッキングピンクのスカルがテーマの様だ。片翼の髑髏が黄色のレコードをチェーンで捕らえ、どこかに奪い去ろうとしている。髑髏の心臓の部分には赤紫に輝く炎が揺らめいている。

そして残された卵は核を中心に渦を巻き、形を成し、色を付けていく。

涙月の方は大きな三日月に乗るマント。白いレースのマントが人型を取り座っている。

雫月の方はショッキングピンクのスカルマスクを被った黒い魔術師。マスクの左目の所に小さな月がピアスの様にぶら下がっている。両方とも大きさは二人と大差無い。

その不思議な二体、そしてレコードと装飾は薄っすらと暁の光に包まれ、動くたびに落書きの様な星が散っていく。

このバイナリーは、一夜が咲麗を解析し作り上げた人工メリーだ。彼女の体はエネルギー『星筏』の集合体。バイナリーでは、六万のヨクトマシン（核）がこのエネルギーを精製・固定する事で人工メリーを作り出す。

聞こえる？

聞こえるよ涙月。

涙月の心の声に白いマントが少女の声で応えた。

ほう、と吐息を漏らしつつ雫月の方に視線を移してみれば彼はもう機能チェックに入っているようだ。

目をあっちこっちに動かしている。今彼の脳には様々な映像が映し出されていることだろう。

彼の空いていた方の耳にも利き耳の方と似たデザインのヘッドホンがある。省エネモードのメリーだ。

メリーはオリジナル、つまり咲麗の産みの親である人間が情報と

認識するものであれば五感情報でも本の上の文字でもプログラムでも取り込み自らの、あるいはヨクトマシンのエネルギーに変換、あるいは新機能として組み込む事が出来るが動けば当然腹が減る。省エネモードであればその減りを半分以下に抑えられる。

雫月は思う。

……PCの機能、同時翻訳、仮想現実、テレポ通信と思考映像操作、それに装置無しでのペアの脳解放。

どれが元々あってどれが追加されたものかわからないけどひょっとして人より上なんじゃないか？

なんで一夜さんはメリーと人間を共棲状態に……

人の性格が姿を与えメリーが機能を与える。それがこのバイナリだ。

怖いか？

今は、まだ……

「ねえ雫月見て！今床に空映してるの。凄いリアル！映像共有パス教えるよ！見て！」

……まあ、隣にこの能天氣が居れば平気だろ。

そうか。

どこか、顔の見えないパートナーが微笑んだ様に思えた。

「涙月。」

それより『バルク・ブレイン』に行ってみようよ」

「あっそうだ私達の星！」

あっちで会おうね」

二人の意思に応じてメリーがそれぞれ『L3・ゲート』を作り出す。

二mの黒い立方体だ。それにそれぞれにあった多少の装飾がなされている。因みに、出る時は同じ場所に白い立方体が作られる。

二人は我先にと宙でゆつくりと回転するゲートに飛び込み、奇妙な感覚を得た。

ゲート通過と同時に体や服が星筏へと変換されているのだ。暁色

の光は無い。あれはメリーだけの現象だ。

それぞれのゲート通過物質を固定する為にヨクトマシンが出力を上げる。

ゲートの先は、新電脳空間と称されるバルク・ブレーン。

まずは固有空間へ。

ヨクトマシンと星筏によって作られるそれぞれの地球。

デザインテーマはメリー等と一緒にだ。

「メリー、あなたの名前考えなきゃだねっ」

カラフルでポップなマークが雲の様に浮かび、様々な硝子製アクセサリーが吊るされたツリーが地面近くに浮かぶ空間で涙月は大きく微笑んだ。

彼女が歩む度に硝子玉の様な地面に様々な形・色の月が現れては消え、木のどこかに作られた扉からレースの小人が出てきては新しいアクセサリーを吊るしている。

ちょこちょここちらへ近づいてくる子も。

ここへはペアが意識レベルで許可したもののみが入室出来、大気部分に付属されたヨクトマシンを使ったプログラムの作成や参加といった事が可能。

とりあえず涙月と合流して一夜さんのところ行くか。オンラインにして。

胸にシヨッキングピンクの針を刺した巨大な銀の髑髏のいる真っ黒な空間で、雫月はそう語りかけた。

彼の声に応えて空間外に色鮮やかな星が出現する。

恒星は別ペアの固有空間、それに従う惑星と衛星がそれぞれのHPだ。

惑星とはヨクトマシンによって作られた星。ゲーム星だったりビジネス星だったりする。衛星とはPC時代に作られていたのと同じHP形式だ。アドレスのみが示され、どこからでも閲覧が可能。

髑髏を縛り付ける、針と同色の鎖の間を縫って雫月の前に彼の星

間移動手段であるシヨッキングピンクの骸骨天馬が降りてくる。

空の上へ昇った雫月が自らの固有空間を振り返る。

そこにあつたのは黄色い恒星。

上で少し触れたが固有空間は外から見ると恒星の様に光によって守られている。これはセキュリティが視覚化したものだ。

自然物と全く見分けつかないな。そういや一夜さんに初めて放り込まれた時マジ異世界とか思ってたよな。

過去を振り返り少し頬を赤らめる。

バルクのテスト版が出来た際、一夜達は涙月と雫月を含めた千人をそうと知らせず様々な手段を用いてゲーム星に招いたのだが、姿が変わる様な不思議を体験してもそれが人の手によって作られた現象だと気付く者は殆どいなかった。

当時は感覚接続型のゲームさえなかったのだから当然と言えば当然だが。

「おおーい」

雫月の視界の端から声がした。

ここは宇宙空間を模してはいるが自然世界での常識は通用しない。現れたのは、可愛くデフォルメされた一両の硝子銀河鉄道に乗った涙月だ。

蒸気機関車の形だが煙の代わりにクレヨンで描いた様なぬいぐるみやアクセサリーがポンポンと出てきては溶けて消えていく。線路も同様だ。クレヨンで描いた様な線路が走る所だけに現れ消えていく。

「一夜さんは流星みたいに光っての移動で超格好いのに何でお前はこんなんだ」

「一夜には綺麗で神秘的なものが好きだけど私は綺麗で可愛いのが好きなの。

天体ってカテゴリーが重なっただけで好きのベクトルは違ふのさ。つつかそっち凄いな色彩的に。目痛っ」

「格好いいのが好きだから格好良くなって」

「可愛いのが好きだから可愛くなって」

因みに、次の大型アップデートではある二つの新機能がつけられる事になっている。

その一つは、『ゲートの位置をイン・アウト時で違う場所に出来る』というもの。

その一つは、『ヨクトマシンプログラムゲートアウト制限の解放』というもの。

ギンツ！

惑星の一つで剣閃が走る。

一方は少し変わったスーツに身を包んだ黒髪の少年。

上着はカラーとラペルは白。ぴんと伸びてシワ一つ無い。それ以外は黒。薄い生地でゆったりしており、派手すぎない上品な光沢を持っている。

パンツも黒だがこちらには光沢は無い。代わりに左足の方には金の金属で裾の方に街の輪郭が、太腿の部分にダイヤモンドリングが装飾されている。

ネクタイの代わりに少し大きめのチョーカーがつけられている。相対するのはコーンを何千も重ねて作られた巨大な蛇。

時折脈打つかのように発光するラインが走っている。

一夜&省エネモードの咲麗VS機械虫。

一夜の耳では星空が桜色のレコードを護っている。右が咲麗だ。

今の咲麗にはヨクトマシンが埋め込まれ、一夜の付けるヘッドホンとリンクし、他メリーと同性能が備わっている。

それはすぐそばにあるかの世界も同じ。

全ての固有空間のモデル、星の惑星『ディスク零号』。一夜と咲麗の固有空間。

零号の所有するこの天球儀惑星にはある性質を組み込んである。コンピュータウイルス一種につき一体をおびき寄せ、ここで倒す

事によってウィルスは同タイプ、派生型を問わず世界全てから消滅し、二度と存在出来なくなる。

ネットワークは全てがこちらに移行したわけではなく、更にこちら用のウィルスが発生しないとも限らない。故にこういった作業も必要だ。

別の場所では星継のメンバーも戦っているはず。

耳に流れてくる曲に合わせて刀を回転させウィルスに最後の一撃を加える。

パアッ

敗北したウィルスが分解され消えていく。

「一夜あそこ」

囁かれる咲麗の声に顔を向けてみれば、覚えの無い建造物が。

紫の尖塔が六。複雑な回廊によって結ばれている。距離は十？といった所か。とすると、大きい。

「見えなくてもセキュリティはあるんだがな……」

「周りにモンスターがいっぱい。製作のクセは同じ。」

英国からたった一人で感覚接続型の端末を使ってヨクトマシンを操ってる。

行きましよう」

凜とした発声。しかし優しい姉の様な声音。

彼女の声にあわせてレコードとその周囲に存在する八十八の星座とそれを包む淡い桜色の光が波の様に揺れる。

彼女は色を得た際一夜とリンクし、彼の性格が反映された姿を得たわけだが、あれから長い長い月日一緒に居た結果　彼女を包む光は暁の色ではなくなった。桜色をベースに時折風の様に色鮮やかな星が流れている。

レコードも同様。

これは彼女だけの現象ではない。

長く共に居る、或いは深く信頼しあい強く結ばれると暁色から変化していくのだ。

今こちらに向かっている双子が色を手にするのはもう少し先。

数分後、二人の眼前にはモンスターの大群が。

一体一体デザインが違う。

ヨクトマシンは自分所有ならば思考するだけで簡単にプログラムが組める。

とはいえ微細かつ繊細なデザインや性能を組もうと思ったらあらゆるセンスと時間が必要になる。にも拘らずこれだけの数のモンスターを作り侵入させ、更にリアルタイムで操作するとは。

解放脳、ではないな。元々の稼動域の精度がいいんだ。

解放脳、つまり脳の解放とは未稼働の領域でありジャンク領域として研究の対象からすらも外れた領域を使用可能状態に組み替える事を言う。

そうしてサブ人体CPUとなった領域は演算・記憶・あるいは神経伝達速度等で自然稼動域をサポートするのだが、解放域の精度は自然稼動域の精度に比例する。

これで解放脳が加わればちょっと怖いかな？

考えながらもモンスターを倒しつつ塔に近づいていく。

そして塔の中へ。

横に広い豪華なソファの中央にゆったりと、しかし可憐に座るのは、騎士か、シスターか、貴族か。いずれかを、あるいは全てを連想させる少女だった。

白ドレスの所々には紫のクリアガラスの短剣。黄緑色の瞳。瞳と同色の、背丈の倍以上に伸ばされた髪は先の方が緩やかにウェーブしている。

これも自然世界から操っているのだろうかこれまでとは明らかに雰囲気異なる。分身というレベルで考えてもいいのだろうか。

幼い？いや、どうだろう……十代だとは思うがどうにも年齢が掴めない。

少女が笑う。

微笑ではない。尊大で、慈愛で、蔑視で。それは本来『少女』が持つ笑みではない。

それを見た一夜も笑う。

それは、少女と同種の笑み。

少女が、剣を抜く。

少女の背丈ほどの長さの銀のブレイド。紫のヒルト。ガードの部分には小さな銃も付いている。これだけならただの剣だが、問題はその形状だ。

剣そのものが一つの巨大な銃になっている。

彼女の体に蛇の様に巻きついた銀の弾丸の列は右手の剣と左手につけた盾兼カートリッジに繋がり、カートリッジの最奥はどこか不思議な空間へと繋がっている。よくよく見れば盾には弾丸の種類を選択出来るディスプレイが付いている。

一夜が、刀を抜く。

十手を刀にした様な特殊な刀身。刃紋は直刃。正絹の黒い柄。目貫は金の桜。手裏剣の様な黒い鍔。実際鍔からは光の手裏剣の射出が可能だ。

一夜の背丈の倍はあろうかと言う巨大な刀だ。故に左腕に装着された黒い鞘は盾の様に大きく、刀身を上からはめる形になっている。一夜曰く「巨大武器は男の憧れ」。

そして、剣戟が始まる。

ガシャンッ！

窓から外へ。

切り結びながら最上階まで来たものの、ゆうに五百mはあるだろ
う地上まで落下をはじめめる。

しかし、二人とも浮遊ブーツを出現させ宙を滑って尚も斬る。

一夜が曲に合わせて体を回転させ遠心力ごと刀を振るう。

少女が弾丸の後を追う様に刀を走らせる。

「「知っているぞ！」」

二人が猛る。

「かつての英雄に脅え影を追い何百年何人も育てられ続ける英雄候補！」

「君の右耳に宿る少女！この眼下に広がるオリジナル！」

「最高の精子と最高の卵子！最高の改良を施された人工の女神！」

「君はそこで百年を過ごしたな！だが若い！まだ隠している技術がある！」

「お前が危惧するのは『キリング・フィールド』と『ビロク』！」

「ユーザー全てを戦士にする為にこちら側のスペックをあちらに持ち出す事も考えてある！技術を他所にやるのも軍事転用を見越してのもの！」

「処刑が先か滅亡が先かあるいは救うのが先か！」

「君は新種！一ギガの脳は百ギガへ！何か得たろう！そして更にその先へ！」

ザシュツ

二人同時に着地する。

楽しそうに、楽しそうに語り、一呼吸。
強い。

ここでは自然世界の筋力と反射神経に加えて知力・精神力・気概が各種パラメータに加算されるが、それを差し引いても強い。
というか巧い。

戦い方を知っている人間の動き方だ。一夜と同じ頭で体を使うタイプ。

反射だけで体を動かすタイプならばリズムも一定ゆえに先読みし易いのだが。

「いい顔だ」

そう言ったのは少女の方。

言われた一夜は僅かに眉をひそめた。

「この善行の塊の様な星をボランティアでやっているにも拘らずそ

のど真ん中でそんな風に笑うか」

「男ってな、純真な正義に憧れると同時に純然な悪意にも憧れるんだよ」

一夜は素直に楽しんでる。この状況を。圧倒的なまでの知力を持ちながらもそれに匹敵する者との出会い、それゆえの予測不能な未来。単純なバトル。

そして、美しい少女に刃を向ける快感。

「不思議な剣技だった。

刃をバトンの様に回転させる流派は無かったと思うが」

「ああ、比較的テンポの速い、けど和をイメージさせる曲に合わせ舞うオリジナル剣舞だよ。流派って程立派なものじゃない。

不思議と言えばそっちもだ。

何だよ銃弾真後ろに剣って。捕らえにくいわ。しかも無限装填で」

「……………」

「……………何だよ？」

「面白いな君は」

「……………俺が？」

「暫く観察したがね」
すんなよ。

「星継トップとして妙な格好で姿を隠し義賊まがいの手法で適度に世を混乱させ、時折著名人を暴き一方で素顔を晒し政治家として法を整え義賊も追い、星継との競争を煽り企業の地方・途上国進出を支援しトラブルを恐れず外からのアイデアを取り入れるよう要求し、スポーツを支援するよう手を打ち、起業支援もした。

若年層雇用を確保する為上の世代の引退を促し変わりに格安で使
用出来る学習・娯楽施設を建設。

地域ごとにコップを用意し発展状況に合わせて水を注ぎ少ない所
から多めに支援していく。

目に見えるというのは実にわかりやすい。

そして終戦のあの日国際舞台で敵大陸国の首脳を容赦なくぶん殴

り彼らの捏造・非道を暴き言葉で追い詰め技術で追い詰め更に一国を落とせる程の新軍を惜しげもなく披露する。と同時に正体を表し星継中心メンバーを披露。

その場で政治家としては姿を消し、既に送り込んでいた者達に後を任せる。

後の混乱を星継批判に向けない為に大陸国家が敵になった理由、数千年前の大陸国家を襲い蹂躪した八つ首大蛇を退治した君の国の伝説、カラクリ国家『天戸靈国』ヤマトレイコクを地中・海中から再起動・披露し、その話題が静まった頃に今度はどこぞの聖人の棺を世に出し結局批判は君達に向けられないまま收拾した。

悔しかったろうなあ。

嘗て島国に助けられ大蛇との戦闘で多くの戦士を失った靈国を奪おうとしたら国を隠され何千年も見つけられず地味な嫌がらせを繰り返した拳句また島国出身の君に負かされ靈国を目の前にして牢屋行き。

気持ちを汲みつつ微笑み見下し心の底から優しさと冷酷を表現し人の心を掌握。

素で善悪を持ち合わせ頭で使い分ける。

稀にして脅威だ」

ゆつくりと一夜の周りを歩きながら視線を彼に送り続ける。

一方の一夜も彼女から視線をそらさない。

その間も、互いが笑みを絶やす事は無い。

「気になる点もあるがな。

一夜、君の目的だ」

「秘密」

「だろうな。

そうそう、あれには笑　もとい感心したよ」

「ん？」

「『お前の百パーセントの努力で向かって来い。俺はそれを才能一つで嘲笑ってやる』」

「うわぁ！」

忘れたい過去だった。

「あの時はな！ちよつとかつこつけるくらいがちょうどいいかと思つたの！」

「いいんじゃないか？」

ヘタレがやると痛い君には実際それが出来るんだ。であれば好きなだけ格好つけるといい。

下手な遠慮と毛嫌いは表現の幅を狭めるぞ」

少女はニヤニヤとしながら一夜の顔を覗き込む。

「~~~~~で？大体予想は付くが何しにここまで？」

「私を攫ってくれ」

それは、フランスを救う為のフランスからの脱出。

フランスは彼女を国外に出さない。

最高の遺伝子を、教育を、美を、骨を、神経を与えたフランスの秘密。

彼女、彼女達はフランスの民衆を導く為に存在する。

これまで幾人も放たれてきたが英雄として認知される者も居れば全く歴史に名を残さない者もいる。

それでもフランスの為に戦う者、それが彼女達だ。

しかし、今回導かねばならないのは一国ではない。世界だ。

彼女達は世界に散らばり世界を導く。

故に彼女は祖国を裏切り祖国を守る。

敵は二種。

『キリング・フィールド』

国家制裁を担う秘匿最高軍事力。

五段階に分けて行われるその制裁は

五等級で事故・病気を装い特定人物のみを

四等級で天災を装い地域を壊し

三等級で経済を壊し

二等級で政治と宗教を乱し

一等級で直接軍事力を行使する

四・五の場合は執行の前にキリング・フィールド内に存在する『執行を避ける為の役人』がまず対象の国に入り立て直しを図る。

特定の国が出資しているわけでは無く、誰もそのトップを知らず、一般人に至っては存在すら知らない。

しかし圧倒的なまでの力を持つ彼らは恐らくその方面だけであれば星継に並ぶか上に行く。

その彼らについて妙な情報が存在する。

執行対象が人間全てになったという。

真偽は未だ定かで無く、星継も探っている状態にある。

『ビロク』

空から来る隕石。

エネルギー。

異星で発生した『ヴァージンメリーのビロク』。

つい先日的事だ。

星継の中心メンバーが星嬢の脳の部分、つまり理事室に集まり次に何を作ろうかと話していた際。突然室内に映像と文字と思われるものが溢れた。

それは、地球とは別の星の成り立ちから終局までを再現したものであった。

ある理事は感嘆し、ある理事は視線だけを向け、ある理事は文字の解読をしていた。

そして、理事長たる一夜を含めた全員がある一時期の映像に注目した。

即ち、ビロクの来襲。

ビロクは宇宙に進出する際あらゆる環境への適応を可能にする為知性体でありながら獣性を回帰させるに至った。

そして、他生物の自我という情報の究極を吸収する事で進化するようになる。

彼らは自らの産みの親である種を喰らい滅ぼし、星を回り、ついにかの星に辿り着く。

この映像の星の知性体は彼らの餌となった。

最後の手段としてビロクの情報と共に救難信号を空に飛ばした。それがこれだ。

英国の少女が知っていた事を考えれば同種の方法かはわからないが幾つもの情報を飛ばしていたらしい。

懸命だ。成功が欲しければアクセス方法は幾つもの持ったほうがいい。

しかし……ビロクは既に地球に向かっている。来襲を受けた知性体はどうなったのだろうか？生き残ったのか？滅んだか？

気になるところではあるが、気にしているうちに地球が、人間が滅んでは元も子もない。まずはビロクを撃退しなければ。

……拉致りに行くか。皆ついて来てくれるかなあ。

シュツ

空気の抜ける様な音をほんの少しだけ出しながら紫色のクリアガラスで作られたカプセル型ゲーム機が開く。

姿を現したのは騎士か、シスターか、貴族か。いずれかを、あるいは全てを連想させる少女だった。

「お帰りなさいレザムルーズ。

楽しかった？」

ゆっくり体を起こす彼女　レザムルーズを迎えたのは金のストレートの髪を腰まで伸ばした若い女性。

「カプリコルヌ……また貴女はそんな事を」

『そんな』とは、二人用の小さなテーブルの上に並べられた料理の数々の事だ。

英雄候補達の頂点に存在する彼女には専用のコックが宛がわれている。しかし、困った事にこうして時折カプリコルヌがやってきて彼の仕事を奪ってしまう。

好かれている事は気分的に悪くないし、話し相手が居る事も悪くない。料理の腕も良い。

しかし立場が悪い。

「王女ですよ？貴女は」

「いいじゃない。」

女としてのステータスを上げる事は私自身にとってプラスなのだし。

さ、座って。髪をといてあげる」

言いながら椅子を引く。

しようがない、浅くそんな表情を出しながらイルは椅子にかけた後ろに立ったカプリコルヌの香りがふわりと漂ってくる。

この香りも、髪にかかる彼女の手も、イルは嫌いではなかった。少し視線をずらせば視界に床と、その中央に作られた竜の形をした窓が入ってくる。そこから覗けば階下に居る他の候補者達が食事を取っている様子が見て取れる事だろう。

彼女達は礼節を重んずる。

上位に存在するレザムルースとこんな風に親しくはしてくれないだから、

「ごめんなさいね。メリーを用意出来ればいいのだけど」

こんな顔をされると申し訳ない気持ちになってしまう。

「自分の立場は理解していますよ。」

私達ならゲートの出現位置を操作し他所に行けるかも知れない。そうなれば機密どころではなくなってしまう」

「話すとも思えないけれど」

「裏切りも考えねば。」

最悪を想定し最善を尽くす、それが国です。

それに人とリンクするあれが『私達』とリンクするかも怪しいで

すし」

「そう……では……」

どうして貴女からあの人の香りがするの？」

絶句。

時間にすればほんの一瞬程度だが確かにレザムルーズの意識は空白になった。

あの人とは、一夜の事だ。

この王女と一夜には繋がりがある。

王女を救ったのは一夜だし、一夜が以前政治家としてあつという間に上に行ったのは王女が、そして英国王室と言う後ろ盾が存在したからだ。

それは良い。

問題は彼女が一夜との接触到に気付いた、と言う事だ。

開放脳ならばテレポ通信も感知出来る。勿論内容まではわからないが。

戦闘中、彼は何処にも通信していなかった。レザムルーズが戻ってから彼女は連絡を受けていない。

「……何故？」

気付いた？

「貴女の細胞を通る血が、連れる記憶によって反応を変えるから」
解放脳による把握と理解の拡大。

レザムルーズにも似た様な事は出来るが記憶を読むまでは行かない。

王女が血流で体調を読む事が出来るのは知っていたがこんな事も出来るのか……

……待て、と言う事は……

「如何されますか？」

「どうも。」

あの人は貴女の挑戦を受け入れたのでしょうか？

私はただ自分が生きる為にその状況を使うだけ。

貴女の目的がいかにせよ」

やはりばれている。

「結果一夜が死ぬ事になっても？」

「死にませんよ。」

あの人貴女の考えを看破出来ないとは思えない方がいいわよ。

彼はただチェスの様に貴女と言う女王を狩るだけ」

「……ホウ」

世界記憶盤、は、国議 国際議連の承認がないと使用出来ないはず。単純に頭だけで見透かされたか。

「はい、終わった」

髪を梳いていた櫛を離し、王女はこれまでの雰囲気噓の様に幼い笑顔になる。

向かいの席に着こうとする王女を見ながら思う。

着く瞬間に椅子蹴飛ばそう。

太陽が地球に隠れようとしている。

このステーションからあの炎の塊が全て見えるのはごく短い時間しかない。

手どころか目からも隠れようとする神秘の恒星をレザムルーズは見つめる。

あれを捕らえ操ればどれだけの快樂が得られるのだろう……

未知の領域への渴望。

一夜はもう辿り着いているのだな、次へ。
憧れ。

彼女の後ろから雌の獅子が近づいてくる。生物ではない。曲線をベースに作られた金属生命の獅子。頭上には雄の獅子をあしらった王冠が輝いている。

獅子の脚が床につくたびにソーダの泡のような光が脚に浮かぶ。

少女はそつと獅子の頭を撫でてやる。
来い、一夜。
私も行くぞ、君の居る場所へ。
その先へ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4016w/>

星を身籠るエトワール いっこめ

2011年9月6日03時11分発行